

門脇篤史歌集

『自傾』

(現代短歌社)

タイトルに対して、傾きなく垂直に引かれた金色の帯のような装丁が目を惹く、前作から五年ぶりの第二歌集。

日常的に目にし、触れることのできる題材を取り上げて、さらにその手触りを率直に描写する。決して華美ではないものの一方で平凡でもない修飾と、漢字・ひらがなのつかいわけや旧仮名遣いが門脇の表現を支えている。

〈おいしい〉と名づけられたる牛乳のパックのふちに
きふの日付

やはらかく南瓜は煮えてかどといふかどのくづるる生
のさみしさ

朽ちてゆく花瓶の花の棄てどきを思ふがごとく職場に
ゐたり

知らぬ地をカーナビなしにゆくやうにあなたのこゑに
あひづちを打つ

歌集には、非人物を主語としている歌や、主語不在で動作そのものに焦点を当てた歌を多く目にする。しかしそれらの歌は安易な擬人化や説明に陥らず、どの歌にも作者である門脇の視線が確かに存在している。

門脇というフィルターを通して屈折し傾いて写された対象や動作が一見淡々と現れ続けるが、読み心地は重たくない。何度も作者の傾きに触れることで、読者は自身の傾きを見つけられるのかもしれない。

(宮 梓一)

堀静香歌集

『みじかい曲』

(左右社)

大学時代から短歌を始め、教員として就職、結婚、山口県への転居、出産、と人生の大きな節目を迎えるなかで編まれた第一歌集。しかし歌集に並ぶのは筋書きのない真正な生き方でありまっすぐな短歌だ。

朝ドラの明るい曲を口ずさむ 登場人物の少ない暮らし

大きな窓に大きな窓のその分のただ真つ白なこの曇り
空

ふいに綿毛が目の前にきて目で追えば乾いた朝の横断
歩道

人生に大きなことが起ころうとも起こらなかりうとも、しつかりと自分を生きることの強さを感じる歌が並ぶ。飾り立てようとも大きく見せようともしない。細かく素直にまっすぐに捉えていく。

なんてことない一度きりの夕焼けの町にあなたを差し
だしている

かつやのかつ井の美味さに手をたたくように月日は、
いや一日は

多くの人は日常や人生の出来事に意味を持たせようとす
るし、短歌を作るうえで形にしようとする。だが、
そうでない短歌がここにある。読み終えると大きな安らぎ
を感じる歌集である。

(磯川朋美)